

# 台灣に生き続ける旧制高等学校

## ——台北高等学校創立九〇周年記念系列活動

河原 功

### ■台北高等学校創立から閉校まで

戦前の旧制高等学校は、エリート青年を育成する学校として、〈帝国日本〉の各地に三四校（北海道・京城・台北帝大予科の三校と学習院高等科を含めると三八校）が創設された。このうち旧植民地では台北に、「台湾總督府高等学校」（後に「台北高等学校」と改称）が一九二二年に創設された。尋常科四年と高等科三年の課程から成る、全国でも数少ない七年制高等学校で、高等科一回生が入学したのは一九二五年であった。

卒業後に帝国大学等への進学がほぼ約束されていた高校生は、在学中は知性を磨き、心身を鍛え、友情を育む努力を惜しまなかつた。日本国内の旧制高校は一九五〇年まで続き、しかもそのほとんどはその後に新制大学に転換して生き残つた。ところが、台北高校は一九四五年八月の敗戦で拠り所を

失い、一九四六年三月卒業生を最後に閉校となつた。

台北高校で学んだ卒業生の総数は、結局二四〇〇名（うち台湾人は六五〇名）であつた。

### ■台北高等学校創立九〇周年記念系列活動

二〇一二年一〇月、台北で「台北高等学校創立九〇周年記念系列活動」として、種々の企画が実施された。校内刊行物の復刻、関連書籍の出版、記録映画の制作、二日間にわたるシンポジウム、「自由の鐘」の贈呈式、記念大会の開催などである。

これらは蔡錦堂教授（国立台湾師範大学台湾史研究所所長）の尽力によるところが大きい。

## 一 校内刊行物の復刻、その他の出版

### a・台北高等学校学友会誌『翔風』の復刻

台北高校の学友会からは会誌『翔風』が一九二六年三月に創刊され、四五年七月までに全二六号が刊行された。だが、創刊号は配布されることなく、発行後に全冊回収されてしまつた。出来具合が「貧弱で、みつともなくて他校と交換が出来ない」という理由で、三澤糸校長が「全部お蔵にされ」(長谷川光雄一九三一年卒)たという。

第二号からは英語の林原耕三教授(夏目漱石の門下、俳人「林原未井」)が担当することになり、このことが台北高校の文芸熱を高め、学友会誌『翔風』を他校の会誌と遜色ないものに仕上げることになる。教員の中にも、林原をはじめ、ドイツ語の杉山産七(成瀬無極の門下)、英語の森政勝、小山捨男も文学好きで、『翔風』に毎号のように作品を発表していた。そのうえ、下村虎六郎が教授(後に校長)に就任したこと、校内での文芸熱がいつそう高まつた。下村は「内田夕闇」で知られていた歌人でもあつた。後に『次郎物語』で評判となる「下村湖人」その人である。やがて中村地平(本名治兵衛)が〈内地文壇〉で、濱田隼雄が〈台湾文壇〉で活躍するが、彼らの文学の下地はここ台北高校で培われたことになる。『翔風』には、戦後の日台経済・文化交流に貢献する辜

振甫、法曹界に進んだ王育霖(一九四七年に一二八事件で殺害された)、その弟の王育德(台灣語研究者、台灣独立運動家)もまた、論文や小説、詩、紀行文を寄せている。「昆虫博士」の異名をもつた鹿野忠雄は、学業そつちのけで台湾山地を駆け巡り、貴重な研究報告をこの『翔風』に毎号のように発表した。戦後に日本に亡命して小説「香港」で直木賞を受賞する邱永漢(本名・炳南)は、詩を数編発表している。

### 『翔風』には他校の会誌にない大きな特徴が二つある。

一つ目は、台北高校が日本人の生徒だけでなく台湾人の生徒もいたことで、『翔風』には両者が作品を寄せていたといふことである。『翔風』に台湾人生徒と日本人生徒の作品が並んで載つてそのレベル向上に努力している光景は美しく、これは他校の会誌にはない、台北高校だけの『翔風』の最大の特徴である。

二つ目は、目をひく表紙の美しさである。多色刷りの洒落た表紙、しかも台湾を代表する画家塩月桃甫(尋常科の図画教師)描く絵のすばらしさは他校の会誌にはないものであつた。『翔風』全二六号の表紙のうち桃甫が一六号分、生徒が五号分、題字のみが五号分となつていることから分かるよう、編集部がいかに塩月桃甫を高く評価し、かつ桃甫に依存していたかがよく分かる。

最終号となつた第二二六号は、用紙統制等の厳しい環境、空襲による被害が拡大しているなか、なんと敗戦一ヶ月前の発行である。

今回、「台北高等学校創立九〇周年記念系列活動」の一環として、『翔風』（創刊号は欠）を南天書局から復刻することができた。解題と総目次は河原が担当した。

b. 台北高等学校新聞部発行『台高』の復刻

『台高』は台北高等学校新聞部から、『台高新聞』の後継誌として、一九三七年二月に創刊された。そして、第一八号（一九四〇年二月）をもつて廃刊となつた。廃刊の理由は、戦局の悪化に伴う用紙統制に従わざるを得なくなつたこと、印刷物統廃合に抗しえなくなつたこと、「新体制」に向けて学友会も組織変更することが決まつたことによる。新聞部発行の『台高』は、文芸部発行の『翔風』と合併して「新体制」となつたわけである。『台高』は消えて『翔風』一誌となつたが、編集は移川丈児（一九四二年卒）を長とする新聞部が主導することになつた。戦時体制に寄り添つた記事も載るようになるものの、文芸作品もあつて、外観的にはこれまでの『翔風』『台高』路線を折衷させたものとなつている。

『台高』の特徴であり、その価値を高めているのは各種の情報が載つているところにある。「学内ニュース」や

「七星寮便り」といつた高校生活に直結した記事は、その時々の台北高校の様子、生徒や教員の動向を伝える貴重な記録を残してくれている。

『台高』には高等科生徒の執筆が多いが、尋常科生徒の寄稿、卒業生の投稿もあり、教職員の執筆も目立つ。まさに台北高等学校あげての雑誌といえる。さらに台北帝大の教授陣も加わつていて、層のあつい内容となつていて、この『台高』もまた南天書局から復刻となり、解題と総目次は河原が担当した。

c. 『国立台湾師範大学図書館所蔵台北高等学校図書目録』の出版

敗戦時の台北高校には二万七〇〇〇冊を超える蔵書があつた。創立九〇周年を記念して、残存する九〇〇〇冊余りを収めた蔵書目録が出版された。これをもつて、台北高校生の読書傾向の一端を伺い知ることができる。

d. 徐聖凱著『日治時期台北高等学校与菁英養成』の出版

著者は台湾師範大学博士課程の院生で、本書は修士論文をベースにしての出版である。台北高等学校研究としては本格的なもの。豊富な情報やデータが織り込まれていて、資料的価値が高い。

## e・台北高等学校歴史記録映画『白線帽的青春』の制作

当時の写真、卒業生（藏本人司、富田敏郎、川崎健、李登輝、辜寬敏、黃伯超、張寬敏等の十数名）の回想、日本寮歌祭での「台高踊り」、蕉兵会（台北高校学徒兵の集まり）の会合、二〇一二年春に改修工事を済ませた生徒控所での記念式典の様子など、三〇分ほどだが、中身の濃いドキュメンタリー映画である。日本語のナレーションや字幕もあってわかりやすい。市販品のため購入可能となっている。

校内刊行物（『翔風』や『台高』）、制服、写真などが展示された。一定期間の展示だが、その後は図書館内の「台北高等学校資料室」で常設展示されることになっている。

## 三 台北高等学校創立九〇周年シンポジウム

シンポジウムは一〇月一一日と一二日の二日間、師範大学図書館の国際会議場で開催された。

## 二 台北高等学校創立九〇周年文物資料展

師範大学図書館一階ホールに、三澤校長がアメリカから持ち帰つて台北高校のシンボルとなつた「自由の鐘」（本来は二つで一对だったが、戦後の混乱期に一つは消失）、教職員の身上書、

白柳弘幸（台北高等学校と成城高等学校、「自由」な校風と三名の教育者）、丁仙伊（韓国）「京城帝国大学予科の設置とその性格」、河原功（台北高等学校の文学世界の設置とその性格）による基調講演、「旧制高等学校の栄光と残照」、引き続き六編の発表があった。

●書の真髄が、ここに結晶！

## 書聖

吉川蕉仙 編

「王羲之の真髄を極める」ために不可欠な劇蹟31点を全て原寸カラー図版で掲載。早期の姨母帖や月初帖から最高傑作の蘭亭叙まで墨蹟本を中心に収録したほか、数多くの集帖より楷・行・草書の法帖を厳選。新文と簡潔な解説を付す。

A4判・104頁●2100円（税込）

二玄社

東京都文京区本駒込6-2-1  
Tel.03-5395-0511 http://nigensha.co.jp



書聖 王羲之の書

吉川蕉仙編

最新刊

# 王羲之の書



—「翔風」「足跡」「南方文学」を軸として、津田勤子「エ

リート候補生たちの教養広場—台北高等学校尋常科クラ

ス回覧雑誌『雲葉』を例に」、張文薰「文学者の前身—

台北高校文芸雑誌と台湾文壇」、岡崎郁子「王育徳と邱

永漢—その文学と確執」

二日目は黄伯超氏（一九四五年台北高校卒、前台湾大学医学院院長）による基調講演「台灣籍台北高校卒業生の戰後台灣發展への貢献」、引き続き九編の発表があった。

蔡錦堂「台北高等学校の校長と教師の群像」、張季琳「下村湖人と台北高等学校」、所澤潤「社会的リーダー階層と台北高等学校」、黃俊銘・黃天祥「日治時代台北高等学校の建築」、洪致文「台北高等学校のキャンパス空間と建築の特色」、鄭麗玲「青春の夢—台北高等学校の学生活」、歐素瑛「台北高等学校と台北帝国大学の人事交流」、徐聖凱「台北高等学校から台北高級中学への移行と断裂」、林初乾「台北高等学校と台灣師範大學」語つているとおりである。論文集としてあらためて出版されることになつてるので、間もなくそのほとんどは読めるようになる。

#### 四 台北高等学校創立九〇周年記念大会

記念大会に先だち、一二日に前夜祭（國賓大飯店）が台北高校同学会会长辜寬敏氏（一九四六年卒）の主催で開かれ、六〇名ほどが招かれた。辜寬敏氏の「政体がどう変わろうとも台北高等学校の卒業生として日台の交流を大切にしていくこ

う」という挨拶は印象的であった。

一三日には記念大会式典（老爺大飯店）が一二〇名ほどの出席のもとで執り行われた。

会長辜寬敏氏の挨拶、蕉葉会会長蔵本人司氏（一九四二年卒）の挨拶、元台灣總統李登輝氏（一九四三年卒）の挨拶があつた。李登輝氏は、「十二年間の、いわゆる中華民国總統として働いてきたところの基本的な考えはここ台北高校で築かれた」「あのときに築いた同学のよしみは、その後も絶えることなく続き、今日の台湾と日本の交流の架け橋となつていて」、そして「我らの深き関係を新たにしつつ、日台の心と心の絆を築いていこう」「母校台北高校の『自由と自治』のすばらしい伝統を永遠に伝えていくことを心より願う」と、日本語で力強く述べられた。

次いで、消失していたがために新たに製作した「自由の鐘」（現在富山県高岡で鋳造中の一つ）の贈呈式が行われ、台灣師範大学学長の返礼の挨拶があつた。学長は、「建設当時の主要



元台灣總統李登輝氏（1943年卒）



学友会誌『翔風』（表紙・塩月桃甫）

な建物を今後も大切にしていく、「台北高校の自由と自治の精神を引き継いでいくことを約束する」と述べた。

その後の祝宴では、食事をしながらの歓談で賑わい、卒業生や家族のスピーチ、歌の披露が続いた。さらに李登輝氏には応援団の羽織をまとい、破帽をかぶり、高下駄を履いてもらいうという一幕もあった。終盤では校歌（校長・三澤糸の作詞）や寮歌、「別離の歌」（豊見山昌）の作曲・作詞）の合唱があり、最後は黃伯超氏（台北高校同学会前会長）の挨拶で式典・祝賀会は和やかなうちに終了した。

今や、卒業生の最年少者も八三歳となり、台北高校同窓会の「蕉葉会」（日本）も「同学会」（台湾）も先細り傾向にある。それでも、十年後に日台合同での一〇〇周年記念式典を開催しようとも励ましあつて、参加者は会場を後にしていった。

### ■ 最後に

今回の「台北高等学校創立九〇周年記念系列活動」は、台北高校の精神「自由と自治」の重みを感じさせるものであつた。すでに閉校となつた台北高校が、台湾の地で今なお生き続けてること、将来にわたつても生き続けていくことに深い感銘を受けた。

（かわはら・いさお 東京大学非常勤講師）